

~~~~~  
書評・紹介  
~~~~~

小谷信千代著

『法と行の思想としての仏教』

佐々木 閑

本書は大谷大学教授小谷信千代氏が一九九九年に大谷大学へ博士請求論文として提出した原稿にさらなる手直しを加えて出版されたものである。本書の目的は、仏教という宗教の基底を

なす法という概念と、そしてその法に基づいて実践される修行の実態を原理的に説明しようというものである。当然ながら内容はきわめて哲学的、思弁的であって、気軽に読み通せるような書物ではない。律蔵のような具体的日常に関わる文献ばかり読んでいる私が、このような重厚な仏教哲学書を読んで書評を書くなど、分にそぐわぬだいたいそれた所行であるが、常々敬愛する友人小谷さんの業績に多少なりとも目に見えるかたちで敬意を表したいと考え、あえて筆をとることにした。とは言っても問題を哲学的に掘り下げてどうしようとは思わない。小谷さん自身も述べているように、本書はより大きなスケールの研究を目指して歩み出した、その第一歩である。詳細な議論は、研究がさらに進んで、全体像が明確になった後でなされることになる。ここでは、私なりに理解した本書の難解な内容を紹

介し、若干の意見を添える程度でご容赦願うことにする。なお、友人の著作に書評を書くとなると、ついほめことばが多くなってしまい、それを読んだ人たちが「佐々木は小谷さんの友達だからいい加減にほめているだけだろう」とすぐに見破ってしまふ。そのような書評では書く意味もないので、本稿ではあえて心を鬼にして、よいところはできるだけ筆を抑え、批判すべき点だけを強調して書くようにした。よいところは一切無視したと言ってもよいくらいである。それが友人だからこそ書ける書評であるとの自負もある。小谷さんにはその点を重々承知していただいて、御寛恕の程、お願いしたい。

本書は大きく二つの章から成っている。第一章「法の意味」は、題名どおり、仏教において法という語がどのような概念として理解されていたかを、諸先学の説を引きながら考察するもの。第二章「瑜伽行における法の修習」は、主として有部のアビダルマ論書と瑜伽行派仏典を資料として、実際の修行方法、特に初歩段階での修行の実践法を考察し、小乗と大乘における修行形態の違いなどを綿密に考察するものである。それでは、その内容をもう少し詳しく紹介していこう。以下、敬称略。「小谷」とあるところは「敬愛する友人小谷さん」の略号である。

第一章の内容

まず小谷は、法の意味を体系的に研究した先学たちの説を紹介する。初期仏教文献から四種の法の概念を抽出したガイガ

夫妻の研究を皮切りに、金倉圓照、平川彰の意見を綿密な考察を加えながら検討していく。ガイガー夫妻の説は純粋に文献学的見地から法の概念を分類したものであるが、これを批判しつつ「いろいろな法の意味に一貫した固有理念を探し出すこと」と、「仏教独自の法の意味をみつめること」という二つの目的を掲げて独自の見解を発表した金倉の研究を小谷は高く評価する。金倉によれば、仏教独自の法の意味は「教え」と「事物」の二つである。そして本来、法則性を意味していた法という語が、事物という意味をも含むようになった理由を、「作用を行うものと、その作用によって生じた事物とを同一の語で表す」というインド語の特性に求める。つまり、法則に制約されて生じた事物もまた、法と呼ばれるようになったことである。この金倉の姿勢を支持しながら、一層深く考察を進めたのが平川である。そこには法 (dharma) と行 (samskara) と有為 (samskra) という二つの概念の関連が明確に示されている。私なりの言葉で言えば、それは次のようなものであろう。この世界は事物で構成されているが、それらが無関係に散在しているというだけのものではない。事物は各々が固有のエネルギーを持ち、そのエネルギーを介して他の事物との相互関係を形成している。そしてエネルギー状態が常時変化していくことにより、事物の存在状況も刻々と変化していくことになる。このような世界における事物が法と呼ばれ、エネルギーが行と言われる。そのエネルギーの変化にともなって刻々転変するかたちで現れてくる事物が有為である。ということは、法と有為は實際

には同じ対象を指すことになる。その同じ対象を、エネルギー変化とは一応切り離して、存在する事物という面からだけ見れば法であるし、エネルギー変化に対応して常に転変するという属性を強調すれば有為と言われるのである。したがって法は確かに存在物なのではあるが、エネルギー世界の一要素であるという点を考慮するなら、それはエネルギーと同レベルの概念として捉えることもできる。ここに法の二重性が現れる。流動的で固定的実体としては捉えられない在り方、すなわち行としての法と、自己同一の性質を保つという在り方としての法とである。このような平川の考察を小谷は重要視し、本書の全体を形作る大枠として利用していくのである。

ここでひとつ細かい注文をつける。本書のタイトルは『法と行の思想としての仏教』となっているので、ここまで読んだ私は、法と行というのがつわり dharma と samskara を指すものだと思っていた。第一章第六節などは表題からして「法 (dharma) と行 (samskara)」である。したがって、小谷は dharma と samskara を仏教の根本概念だと考えており、このあとは、この二つの概念を巡る考察が展開するものとばかり考えていたのである。ところが、読んでいくうちにどうもそうではないような気がしてきた。第二章に入ると話は仏道修行に移り、samskara はもう登場しない。それなら法と行という場合の行とは修行ということであろうか。結局全編を通読した今になっても、小谷がタイトルで用いた行という語が一体どちらを指しているのか分からずじまいである。このことが本書を読む

うえて私にとって非常に大きなストレスであった。その疑問ばかりが頭にあって、論理の把握を妨害する。タイトルが読者の理解を妨害する原因になるなどとはおかしな話である。もし本書を改版する機会があるなら、是非とも副題をつけて、タイトルにある行という語の意味を明確にしてもらいたいと希望する。

次に小谷は平川の研究に依ってブツダゴースの法分類を紹介する。そしてその中に現れる *nissatanijiva* という規定の重要性を指摘する。これは法を「物として」理解するさいの規定である。これはブツダゴースが、法を単に生命のない物質として示しているのではなく、業の主体として執着されている「私という有情性」を欠いた存在として理解していることを明示している。そしてそれが仏陀の教えの根本である無我説そのものであることから、ここに法が持つ「教え」という意味と「存在」という意味との接点が見えてくると小谷は主張するのである。

小谷はさらに世親の法分類をもとにプトンが著した記述を、和訳も含めて詳細に語る。そしてプトン説の特性として法と言葉の密接な関係を指摘し、そこに上座仏教と大乘仏教の間に見られる法理解の差異を見て取る。そして法の意味をめぐる研究史のまとめとして、もう一度、金倉説および平川説の要点を述べ、その重要性を再確認する。

第七節で議論はシャカムニ時代のインドへと移る。当時のインドには苦行を専らとする独特の修行者世界があったが、その苦行者たちが残した文献（苦行者文学）を精査することで、苦行と法の関係を明らかにしようというのが目的である。シャカ

ムニは六年間の苦行の末に、これを放棄して法を体得したとされている。したがってシャカムニにとって苦行と法は、同一線上にありながら同一視できないものであったということになる。シャカムニは苦行を捨て、法を選び取った。その理由をはっきりさせることは、法というものの本質を解明することにもなる。小谷がここで法と苦行の関係を重視するのは、このような考察の結果である。それは全く理にかなった方針であろう。小谷は主として現実の研究をベースにしながらかつて苦行と法の相違点を明らかにしていく。そして次のような結論を提示する。すなわち、釈尊が苦行を退けた最大の理由は、それが愛着や執念や怨念を動機として実践され得るものであり、それによつては絶対に執着や妄執を免れることは不可能だと考えたからである。したがって苦行によつて輪廻からの解脱は望めない。輪廻からの解脱は法を知ることによつてこそもたらされると考えて、シャカムニは法を選び取ったのである。

続く第八節で小谷は、最初期經典のひとつ『スッタニパータ』を取り上げ、そこに現れる法の意味を見ていく。苦行を捨てたシャカムニは法を選び取ったが、ではその法とはいかなるものであったのかという点へと議論は進展するのである。そして小谷がそこに見いだした法の意味とは(1)道理としての法、(2)執着否定の教えとしての法、(3)固執されない見解としての法、(4)修行道としての法、(5)涅槃としての法、の五つであった。そして特に仏教において重要なのは、このうちの(2)から(5)の四つであるという。小谷は、これらの用法の根底には、法とは「釈

尊が自ら経験し教えたもの」であるということを開く者に自ずと想起させようという経典編纂者の意図の働きが垣間見える、と言う。すなわち経典に現れる法の内容は、それを説いたシヤカムニという人物のイメージと密接に関連しているというのである。それゆえ、次の研究ステップとして、仏陀観の変遷と法理解の変化との関連がとりあげられていくのである。

この箇所には読む者として若干の不満が残る。本書は冒頭で先学たちの法に関する諸説を紹介しているが、当然それらの研究には『スッタニパータ』の情報も利用されているはずである。小谷は、それらとは別個にここであらためて『スッタニパータ』を調査し、独自に法の意味を語る。それはそれで問題ないが、先学の研究成果と今回の調査結果がどう関係し、対応するのかをはっきりさせてもらわないと、読む方としてはそれら複数の研究成果をどう関連させたらよいのか分からないので、すっきり混乱してしまう。小谷は先学の結果を否定したうえで自説を提示しているのか、それとも両者になんらかの包含関係を想定しているのか、想定しているのならそれはいかなる包含関係なのかを明示して、主張の本旨を読者に理解させる気配りが欲しかった。

さて、話しは仏陀観へと移っていく。スッタニパータには次の四種の仏陀観が見られるという。(1)偉人化されない釈尊、(2)偉人化された釈尊、(3)過去仏思想の出現、(4)仏陀を形成する法。同じ『スッタニパータ』にも、これら四種の異なる仏陀観が現れており、それは古い順に(1)から(4)へと時代的変遷を表してい

るという。そして中でも(4)は仏教史上、きわめて重大な問題のきっかけになったと小谷は考える。すなわち(4)は、人間としての仏陀に取って代わるかたちで永遠なる法が重要視されるようになったことを示しており、それが法を固定化し実体化する過ちの第一歩であったというのである。小谷は第一章の末尾を次の言葉で締めくくる。「その過ちを回避して法を正しく把握するために、聞思修の三学の実践が修習の中心に据えられるようになる。就中（日本語が古すぎる・佐々木）、法を観察の対象として止観を修習することが必須の事柄とされるに至ることは、法思想の展開を考慮に入れば、極めて自然な成り行きであると言わざるを得ない。従って法の意味の全貌を把握しようとするれば、それが実践される行との関連において法が如何に捉えられていたかの検討が必要とされるのである。」というわけで、法と行の関係を考察することの重要性がここに生じてくる。そしてそれを受けるかたちで次の第二章「瑜伽行における法の修習」が始まるのである。ここから見ると、やはり本書のタイトルにある「法と行」の行とは修行のことではないかとも考えられる。

この結論で小谷が主張していることは極めて重要である。仏陀観の変遷が、その後の仏教の修行体系を決定していたというのである。「法を見る者は仏を見る」という耳慣れた文句にこそ、仏道修行の真の意味が隠されているというこの見解は非常に斬新であり、アビダルマから大乘という大きなうねりの根本原因を解明するひとつの切り口になる可能性がある。本書で

はいまだ問題提起の域を出てはいないが、将来、この点を一層深くつきつめていくことで、思想と実践の両者を包含する新たな仏教観が開けてくるかもしれない。どのような学問領域においても最も意味のある作業は問題提起である。何を説明すればよいのかというポイントが分かれば、仕事は八割方完了したようなものである。その意味からいって、このような問題を提示した小谷の業績はきわめて重要なものであると言えよう。

これで第一章が終わり、続いて第二章「瑜伽行における法の修習」へと入る。第一章で仏教における法の意味をある程度明らかにすることができたので、今度は、その法を実際に修行するとは具体的にどのような行為であるのかを明らかにしていくというわけである。しかし時間的、空間的にきわめて多様な仏教世界全般にわたって網羅的に修行形態を調査することは一個人の手におえる作業ではない。そこで小谷は、的を絞って、有部と瑜伽行派の、しかも初段階の修行法を集中的に考察する。その理由は、小谷自身の専門領域がここにあるということだけではなく、この両学派がそれぞれ小乗、大乘を代表するグループであることから、両者の差異を明確にすることで修行道における小乗と大乘の基本的性格の違いを明らかにすることも可能になるという合理的な推測によるものである。

まず第二節において三賢位、四善根位、見道位、修道位という修行階梯を概観したのち、修行の導入段階において行われる五停心観の調査に入っていく。五停心観というのは通常、(1)不

淨観、(2)慈悲観、(3)因縁観、(4)界分別観、(5)数息観の五種の観法を指すが、それは最初からこの五つにまともめられていたわけではなく、おそらくは各個独立して成立したものが後にまともめられていったものと思われる。さらには、五種がひとつの単位としてまともめられた後で、さらにその中の不淨観と数息観の二門が特別視されるようになり、「入修の二門」として特化していくことになる。こういったおおまかな変遷の過程を念頭に置きながら、小谷は有部アビダルマ論書から瑜伽行派諸仏典へと、その実際の時間的移り変わりをより詳細に、文献上に跡づけていこうとする。

小谷が考察する文献を、そのタイトルだけあげてみる。これによって五停心観をめぐる本書の議論の流れが見えて来るであろう。まず阿含から有部アビダルマ論書までを考察する第四節では、以下の資料がひとつずつ丁寧に考察されていく。

① 阿含系諸文献…『清淨道論』、Meghaviyasūta、Rahulasūta、『大念処経』、『念処経』、『入出息念経』、『身行念経』、イティヴツタカ、スッタニパータ、マハーニツデーサ

② 第一期阿毘達磨論書…『集異門足論』、『法蘊足論』

③ 第二期阿毘達磨論書…『品類足論』、『尊婆須蜜論』、『発智論』、『婆沙論』

④ 第三期阿毘達磨論書…『阿毘曇心論』、『阿毘曇心論経』、『雑阿毘曇心論』、『俱舍論』、『順正理論』、『顕宗論』
そしてその結論はこうである。「阿含経の段階で不淨観や数

息念は説かれている」。そして、「不浄観と持息念は初期の論書の段階から姿を現している。不浄観は初めは四念住の身念住と同一視されていた。それが次第に四念住とは別のものと考えられるようになり、不浄観と持息念は四念住の前段階のものと考えられるようになる。そしてMeghiyasutta など、不浄観、持息念の他に幾つかを加えて一組の観法を立てる經典を参考にして、四念住の前の段階の一組の修習法が考えられたのであろう。

『婆沙論』は当時伝わっていたそれらの修習法を、そのどこにおいても五種を一ヶ所にまとめて述べることはしていないが、ほぼ五停心観の内容を成す五種の観法にまとめられるものとして念頭に置いているように見える。そしてその要となるものを不浄観と持息念と見なして仏道に入る甘露門と呼んだ。更に『俱舍論』に至って、この二種の観法は止に属し、四念住は観に属するものと明確に区別されるようになる」。

このあと小谷は第五節として附論的な意味合いで、『俱舍論』「賢聖品」の中、不浄観および持息念に関する箇所をサンスクリット原典からの和訳を提示する。そして続く第六章では、瑜伽派の經典を順次考察していく。その資料タイトルだけをあげると以下のようなになる。

- ① 『修行道地經』
- ② 『達摩多羅禪經』
- ③ 『禪秘要法經』
- ④ 『坐禪三昧經』
- ⑤ 『思惟略要法』

これらの資料のひとつひとつについて小谷は、資料論も含めて様々な角度からの検討を加え、五停心観が発展していくなかで、それぞれの資料がどのように位置づけられるのかを明確化していく。個々の資料について重要な情報が提示されているが、それは実際に本書にあたっていただくとして、ここでは総括としての結論を紹介しておく。瑜伽行派諸文献を調査した結果、そこには次のふたつの特徴が見て取れるというのである。すなわちこれらの資料に共通する特徴は「阿毘達磨論書の修習法をその枠組みとし、そこに般若經に説かれるような空思想を盛り込んで、正統派阿毘達磨論書のそれとは異なる新たな修習法を創り出すことを目指している点」と、そして「これらの經典が全て幾つかの既存の經典や修習法を編集して造られたものである」という点である。そして小谷は、ここで大乗仏教興起の由来を読みとることができるように思われると結論づける。

このあと第七節「大乘仏教における行」では小谷は大きく方向を転換し、般若經の中の「法の修習」を分析していく。今まで続いてきた五停心観の問題は前節で終わっていて、ここからは全く別個の議論になるわけだが、そういうった議論の大きな流れがどこにも指示されていないので読み手はここで迷路に放り込まれたような感じを受ける。つまり本書では問題提起↓議論↓結論↓その結論を受けた次の問題提起という標準的な論理展開が存在せず、瞬間的に全く別個の議論へと場面が移ってしまうため、読み手に多大な混乱をもたらすのである。個々の議論に関しては、今後の仏教学の基盤ともなるべきすぐれた内容が

示されているのであるから、それをもつと有機的に接続する配慮が欲しいところである。ともかく第七節の内容を紹介しよう。

道安は禅觀の統一原理の探求という観点から般若經の再検討を思い立ったと言われる。そこで小谷もそれにならって、般若經の「法の修習」の仕方を検討するという。この節で小谷は、般若經を資料として、そこに現れる菩薩行の特性を、いくつかの項目に分けて考察していく。その項目を並べるなら、「菩薩行の概略 — サタープラルディタ菩薩の求道物語を例として —」、「勝解 (adhimukti)」、「真実の理法の觀察」、「菩薩行としての廻向」、「法執の否定と利他行」、「仏にまみえる」、「菩薩行としての三昧の修習」、「唯識説の導入 — 影像を所縁とする修習 —」となる。個々の項目に関しては詳細な議論に基づき、興味深い結論も随所に見られる。これらの項目が菩薩行の一端を担う重要な概念であることも納得できる。ただこれらの項目間の有機的関連性が明示されていないことにはやはり不満が残る。特に最後の「唯識説の導入 — 影像を所縁とする修習 —」は、それまで般若經を資料としていた議論が突然『大乘阿毘達磨集論』などの唯識学派の論書分析へとテーマが変更され、その変更の必然性はどこにも語られないままである。これでは一体我々はなにについて読んでいるのか、分からなくなってしまう。このあたりにも論の必然的流れをしっかりと明示して欲しかった。また、この箇所で小谷は「有分別影像による修習」と「無分別影像による修習」を詳細に論じ、それが唯識思想と密接に関連していると語る。確かに両者には密接な関連はあるで

あろうが、しかし「有分別影像による修習」と「無分別影像による修習」の概念はブツダゴースの『清淨道論』にも現れている。したがってこれを唯識学派だけの特性として扱うことはできない。修習方法から唯識思想の成立を考えると扱う視点はきわめて正統かつ重要なものであると私も認めるが、だからこそ余計に、周辺資料への目配りも必要であろう。

次の第八節「瑜伽行派の法の修習」では、プトンの法分類を基にした瑜伽行派独自の法理解の解明や、教法の消滅という問題に関わる瑜伽行派の態度などが語られる。しかしこれら七ページ足らずの考察をもつてして「瑜伽行派の法の修習」という題はいささか大げさに過ぎる。もう少し絞った題をつけて、読者の理解を助けるよう配慮が必要であろう。

そして最後の第九節（誤植によって第二節となっているが）では、瑜伽行派における縁起説とアラーヤ識説の関係が、諸文献を基に考察される。

以上、内容の紹介を軸とし、適宜、批判的感想を織り交ぜながら全体を概観した。最後に全体を通しての批評を述べておく。本書は小谷がこれまでに発表してきた九編の論文を骨子とし、そこへ新たに手を加えて作られた。その論文のひとつひとつは、アビダルマおよび唯識思想の専門家としての小谷の見識と、サンスクリット、チベット、漢文を自在に読みこなす語学の達人としての小谷の才能とが見事に融合したところに生まれた、きわめてすぐれた逸品ぞろいである。それは私自身、小谷との長年の学問的交友により、身を以て認識しているところである。

そしてそれ故に一層、本書での構成の甘さが残念でならない。問題は構成なのである。個々の要素がどれほど見事なものであっても、それを配置し、連結する作業がうまくいっていないと、全体的な美は生まれない。皆がてんでんばらばらに足をあげたり手を振ったりしたのはシンクロナイズドスイミングという概念そのものが成立しないのと同様、個々の論考が勝手に自己主張しているだけでは論全体としての主張が見えてこない。結局小谷の最終的な主張はなにか、という点が曖昧なままに残ってしまう。これが本書における最大の、そしておそらくは唯一の欠点であると考ええる。確かに個々の論考はそれぞれがしっかりとした主張を持っているのであるから、読み手がそれを確実に理解し、合理性の糸で繋いでいけば、そこに自ずと小谷の主張が見えてくるのであろう。しかしそれは著者のなすべき仕事であって、そこまでを読者に要求するのは酷というものである。現に、この領域の素人である私の場合、こうやって書評を書き終えようとしている今に至っても、「全体としての小谷の主張はなんであったのか」という疑問が頭を去らないのである。こういう疑問を解消する意味で、是非とも小谷には後続研究の発表を期待したい。そして振り返って見た時に、本書の真の意味にはたと気づくような、そういうスリリングな体験を我々に与えていただきたいと希望している。